

健康文化

## 停年退官余波

前越 久

私は、平成11年3月31日をもって名古屋大学を“停年”退官した。名古屋大学では“定年”とは書かないそうである。そこで、停年と定年の違いを辞書で調べてみた。広辞苑でも広辞林でも、見出しは[ていねん〈定年・停年〉]のように一括して意味が記載してあり“定年”と“停年”の区別はされていなかった。ただし、岩波書店の国語辞典では「退官・退職する決まりになっている一定の年齢。『定年』は新しい書き方。」と、両者の使い分けについて記載されていた。とすると、名古屋大学は古い書き方を好んだということになるのだろうか。

一方、「定年制」についての解釈には興味深いものがあった。角川書店の新国語辞典では「一定の年齢に達すると退官・退職させる制度」と、意味付けしているのに対し、三省堂の広辞林では「一定の年齢に達すると退職する制度」、岩波書店の広辞苑では「一定の年齢に達すると退職すべく定めた制度」とある。すなわち、これらの解釈の間には主体性の違いがみられる。冒頭の文章をこれに見合せて書くとすると、前者では「……停年退職させられた。」となり、後者では「……停年退職した。」となる。私は、後者の解釈に従って記述したことになる。因に、任命権者名古屋大学総長から頂いた人事異動通知書には、異動内容の欄に「平成11年3月31日限り停年により退職した」と記載してあった。いやはやどうも、少々理屈っぽくなってしまった。こんなことよりむしろ、停年までなんとか健康が維持でき、この時機に到達し退職できたことを心から喜び、感謝することの方が大切である。

今年、名古屋大学を停年で去った教授は17名である。その内訳は、文学部4名、教育学部1名、経済学部1名、大学院工学研究科5名、農学部1名、医学部1名、情報文化学部2名、大学院国際開発研究科1名、太陽地球環境研究所1名である。昭和10年生まれが対象となる。よく若いころは、おれは昭和2桁生まれだといって、昭和1桁生まれの人より若いことを強調する手段に使っていたものだが、いよいよ昭和2桁生まれの者が停年を迎えるようになってしまった。医学部では、私1人ということであった。平成10年度は医学部医

学科の教授数は42名、医学部保健学科は28名で、合計70名の中でのただ一人ということになり、珍しいことであった。医学部・医学研究科合同懇親会での退官の挨拶の中で、「私より見かけ上、お年を召しているかのように見える教授が何人かおられるようであるが戸籍上の生年月日の数値は変えることはできない」などと負け惜しみを言った覚えがある。

さて、停年を迎えるに当って最もやっかいであったことの一つ（ここでは余波ということにした）に、過去40年余にわたってつもり積った書物や書類をいかにして片付けるかであった。大学での私の部屋には、大きいスチール製の書棚が4本、その半分幅の小さい書棚が3本、小引き出しのアレンジャーが3本、両袖机が1台、片袖机が1台あり、書棚の上には研究資料が一杯詰った半切判エックス線用フィルムの箱が60～70箱は並んでいた。これらの書物や書類を全て自宅に持ち帰っても、とても収容しきれるものではなかった。昨年度、停年退官された工学部の某教授は裏庭にプレハブの物置き小屋を作って凌いだとのことであったが、我が家にはそんなスペースもなかったため廃棄するしか方法がなかった。凡そ、3分の2は捨ててしまったことになる。内容の大部分は論文にしてまとめたからそれでよしとしたものの、思い出深い研究資料も中にはあり、捨てるには忍び難いものも沢山あった。

種々の学会雑誌やその他の定期刊行物など、42年間にもなると膨大なものとなる。参考までに毎月、隔月あるいは年4回または年2回等々さまざまであるが、定期的に当方へ送付されてきた雑誌名などを挙げると次のようになる。

- |                        |                   |
|------------------------|-------------------|
| 1. 日本放射線技術学会雑誌         | 2. 日本医学放射線学会雑誌    |
| 3. 日本核医学会雑誌            | 4. 日本保健物理学会雑誌     |
| 5. 日本放射線技師会雑誌          | 6. 医用画像情報学会雑誌     |
| 7. 断層映像研究会 雑誌          | 8. Health Physics |
| 9. RADIOISOTOPES       | 10. ISOTOPE NEWS  |
| 11. 医療放射線防護 NEWSLETTER | 12. 医学物理士会会報      |
| 13. 東芝レビュー             | 14. コニカ X-レイ写真研究  |
| 15. Film Badge News    | 16. 健康文化          |
| 17. 名古屋大学学報            | 18. 名大トピックス       |
| 19. 日本放射線技術学会東海支部会誌    | 20. 計測分科会誌        |
| 21. 放射線治療分科会誌          | 22. 放射線防護分科会誌     |

### 23. 画像分科会誌

### 24. JMCP report

これらの内、日本保健物理学会雑誌は第1巻、第1号から所有していたことから、また、**Health Physics**、医用画像情報学会雑誌および断層映像研究会雑誌は保健学科の図書室にはなかったのので寄贈し、保管していただくことにした。その他の雑誌は、何処の図書館でも見ることが可能なことから涙をのんで処分してしまった。せめて、自分の論文が掲載されている雑誌だけは抜き出して保存しておきたかったが時間的に選び出すだけの余裕はなかった。

上記に示した雑誌類は、一人の教官当たりにははまだ少ない方であろう。幾つかの外国の学会に加入されている方達は、毎月発行されているジャーナルが数種類個人宛に送付されてくるので30種類は楽に超えてしまうものと思われる。最近の学会雑誌は、写真などの画質を良くするために紙質を上質にしたため、1冊の重量が重くなっている。1年分を束ねて持つとかなりの重量になる。日本放射線技術学会雑誌の旧版（B5版）を最近のA4判になった同学会誌と比較すると、正味120ページ、広告などが30ページ含まれているもので、1冊の重量が423グラムであり旧版の約1.7倍重くなっていた。1年12冊とすると5,076グラムとなる。42年間で213キログラムに達する。もし同じような雑誌が10種類あったとすると2トン以上にもなる。その他、専門書や辞書、書類、資料の類いの重量は軽く1トンは超えるであろう。この退官の時点になって気がつくようでは遅かったが、もっと早く気がついておれば部屋をもう少し広く使えたであろうということである。せっかく学生達が質問にやってきましたり、研究の打ち合わせや談笑にやってきましたりしても、4～5人も一度に来ると部屋は満員になってしまうようなことがしばしばあった。今になって悔やまれてならない。

今年、17名が停年退官した。できるだけ少なく見積もったとしても、全体で数10トンのこれらのものはどのように処理されたのであろうか。折しも名古屋市は今年度よりゴミの分別収集に乗り出した。資源のリサイクルによりやく着手することになったわけである。これも藤前干潟のゴミ処分場が切っ掛けになっている。何かの切っ掛けが良い方向に軌道修正できる切っ掛けに繋がることなら歓迎すべきであり、そんな切っ掛けならいくつでも経験するとよい。

（平成11年5月5日記）

（名古屋大学名誉教授）